

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第六部

第三十三章

4 Ahau 8 Kumku

峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

33・4 Ahau 8 Kumku

313.

314.

315.

316.

317.

318.

319.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	H&L 財団・財務部門勤務
イリチャ	健の息子・真の魂体
エドミール	ポルタアウレア大公国の皇太子
レディ・ユミコ	エドミールの婚約者
ヘルガ	H&L 財団・医療チームのメンバー
レル・ヴァリス	H&L 財団・医療チームのリーダー

313.

ケ・ブランリー美術館。アフリカ、アジア、オセアニア、アメリカ、四大陸の、古代からの美術品の宝庫。

民族学者だったころのヒューダーならば飛びつきたい代物だったろうが、こと、このメソアメリカゾーンときたら現代の桧山健の目には……

「お化け屋敷だ」

前を歩いていたイリチヤが、つ、と立ち止まる。
「あのさー、ここは筆者のでっちあげと違うんだよ、実在の美術館なんだよ。そういうことは言わない約束でしょ」

「気にするな。個人の感想なんだから」

「まったくもう。ぶつぶつ」

「あれだな、あんまり、夜来たいところじゃないな」

桧山健はいたって現実的な人間で、お化けお化けしたものはまるっきり、苦手である。というか、そんなものは信じてないヒトである。ということはお化けそのものが目の前にいたとしても気づかない。だからせつかくの西ノ宮奈々子の幽霊にも気づかなかったわけである。

昼間大勢の観光客が出たり入ったりしている場所ほど、時間外の閑散具合には胸を打つものがある。いやいや。鳥肌がたつ。なんたってここは"あの"メソアメリカの呪術の場を彷彿とさせる場所なのだから。用が無ければぜったい、夜来たいところじゃない。

で、いったい何の用があって、こんなところへ忍び込んだかという……

「どこかにあると思ってたんだ。——ここだったんだ」

イリチヤが立ち止まったのは、人の身長ほども高さのある仮面の前である。生々しく大きく口を歪めた、石造りの仮面。

314.

ここで、三十年前、エドアルド・ディミトリエが独り言を言っていた、「これがあれなのか！」健はようやく目が覚めた思いだ。

「"B"の奴がどこから現れ、どこへ消えるのかわからなかったんだ。どこかにポータルがあるはずだと思ってたんだ。——ここだった」

*

「昔、これはルカティマにあった」とイリチヤは言った。

「ルカティマ……！ また懐かしい名が出てきたものだ」

それはメッサナ市郊外、南へ数百キロのところにあった古代遺跡。

当時でさえ、非常に古いものだった。巨大な方形の石の建造物が四つあり、それらがひとつの中庭を取り囲んでいる。今現在もそれは残っているが、その古さにもかかわらず、天然の石のよう

な、人工の金属のような、風化しない素材と洗練されたデザインのせいで、わりと近世のものだと思われている。

それらの建物が焦点を結ぶ地点は地下世界ミクトランへの入り口であり、出口。

「出入口は異次元への扉。この仮面はカモフラージュのために扉に被せてあったんだ。不用意に近づくと危ないよって意味でこんなおどろおどろした顔をさせて、隠してあったのに。誰かが見つけ出して掘り起こし、ここまで運んできたんだ」

「……地下世界への扉だぞ。よくこんなものに手をつけたな」

「どういう役割をしていたかはともかく、美術品として価値があったんでしょ」

「美術品としての価値——？ 気が知れん！」

健は頭を振って後ずさりした。ヒューダーの記憶がそうさせる。理屈ではない、原始的な驚異と畏怖の念が。

「パリのど真ん中に置かれて見物対象になってたなんて！ 『Fairy tale』がなければ、わかりっこない！！」

健は自問する。

己の人生のどの時点で『Fairy tale』を読んでいたら、この石造りの仮面はポータルなのだと気がついただろう。妖怪"B"がこの世界に現れて目の前で怪異な力を振るった、今まさにこの時以外には、あり得ない。いったいどのような力が働いて、オレはここに立っているんだろう。

レディ・ユミコは『Fairy tale』についてかなり悩んでいたが、もしかしたら、このポータルがすべてなのではという気がしてくる。

「今ここで、奴の名を呼んだら、奴は飛び出してくるんだろうか？」

そうつぶやくイリチャを健は振り返った。警報システムはじめ、夜間照明の類はすべて切られている。イリチャはブラインドを通して射し込む月光を浴びている。この世のものではない、精霊。

健の視線に気づいて、「今夜はやらないよ、安心して。下見に来ただけだから」どことなく、憮然としていう。

そうだ。彼に尋ねなければならないことがあった。

「おまえ、"B"とトラブってないか？」

「……………」

「じゃあ、別の質問だ。『夜の九王』とは何だ」

一ヶ月前のあの事件で、ベネトナシュは何者かの指示でイリチヤをおびき出したことがわっている。その何者かが『五体満足で傷ひとつないイリチヤ』を欲した。千切れた腕を返しにきたのはそのためだ。

何者かは何者なのだ、と健は問う。

テオティワカンの統治者にはフクロウ、あるいはミミズクのイメージがある。フクロウとミミズクの違い？ 耳のあるフクロウをミミズクという。

テオティワカンとは、『神々の都市』という意のネイティブの言葉であって、本来の名ではない。つまりその地は、ミミズクに象徴される神々の住まう場所だったのだ。

さて、ミミズクといたら、『Salamander in the circle』にはひとりいる。そう、ミクトランの女王、テクトリ。

その名を聴いて、健は顔をこわばらせた。あの女王さまには良いイメージも思い出もない。イリチヤにはなおさらそうだろう。

しかし、まさか、だ。現在のテオティワカンメッサナ総督府の、一万数千年も後の世のものだ。百年という時間でも都市は様変わりしてしまうのに。一万数千年である。その間にいったいなにがあったものかと想いを馳せるなら……ミクトランの女王テクトリが支配した時代があるということなのだろうか。

イリチヤはうなづく。そして言う、「それを、ちょっと頭に入れといて」。

伝説上、アステカの原郷はアステカより北方にあり、チコモストク(七つの洞窟)とかアストラン(サギの多い場所、純白の場所)と呼ばれ、いずれも七つの洞窟と関係している。

『ポプル・ヴフ』のマヤのキチェ族も祖先は七つの洞窟から来たという。水鳥がたくさんいる素晴らしく美しい豊かな土地だった、と。

——この島、トーラはエウメロス王国より掘り進めた地下道の到達点である。同時にトゥランの地下都市の窓のひとつとなる。諸君の苦難の旅はいずれここで終わり、そしてまたここから始まる。到達点にして出発の地、それがすなわちトーラである。

かつて地下に避難することを余儀なくされ、たどり着いた地上の場所から旅立った人々は南へと向かい、地上に新たな文明を築いた。避難に至る事件勃発から千年が経っていた。

316.

ポルタアウレアのアランデル大公は、その生き証人のひとりだった。そして、彼と同じ道を辿ったエウメロス王国のかつての王女がそれを裏付けるのを聴くエドミール＝バイスロイは、驚愕の想いである。

ヘルガとレル・ヴァリスの両医師は大公父子を訪問していた。

「すると——現在のメソアメリカに古代遺跡として残っている文明は当初、貴女方のものだったということか！」

「黄金門市とエウメロスの連合、そして七つの地下都市(トゥラン)からの有志が、地上に約束された地(トーラ)に集まり、かつて文明が栄えた地へと旅立って行きました。地下へと避難した世代からすでに数世代経っており、詳しいことはもはやわかりません。けれども彼らが築いた文明は遠い黄金期を彷彿させるもので、アトランティスの最後の輝きだったといえます。けれどもそれも終わる時が来ました。長らく繁栄し、ゆるやかに衰退に向かったこの文明に、とどめを刺すかのような事件が起こった。はるか北方からの侵略者に襲われたのです」

「それは——」

「覚えておいででしょうか。バイスロイさま。あなたがケストル王国訪問中のことを」

「あの時——？ たしかケストルは大惨事に襲われたのではなかったか……」

「そのことを事前に予想したのは私なのだよ、バイスロイ。ヘルガどのは警告を携えてケストルへ飛んだ。おまえがケストルに滞在中だったというのもあったからな」

「そんな危険なことを一国の王女が！？ レル・ヴァリス、おめえたしか近衛隊だったな、どうして止めなかったんだ！！」

「バイスロイさま、バイスロイさま、どうか落ち着いて。私が行かなければならなかったのです。合法的に私を帰国させるために、あなたは私の婚約者として私の代わりにケストルに留まった。お忘れですか？」

「ああ——そうだった」

「問題はその時に大惨事を回避させたはずのケストル人たちですわ」

「え——？ まさかそいつらが？」

「そのまさかです。彼らの子孫は長い年月をかけて大陸を南下し、アトランティス最後の、衰弱した文明を襲ったんです。そしてとって代わりました」

「恩を仇で返す。日本語にはそういう表現がありましたね。ユミコ」

途中でお茶を運んできたユミコは、じっと耳を傾けていた。そして「どうぞお話を続けてくださいませ」と言い、ヘルガはうなずいた。

317.

「それが、およそ14,000年前のこと。彼らケストルの子孫はメソアメリカに築かれた大都市を占領した。そこにはかつてのメッサナの文化も、アンベレオの文化も分け隔てなく、遺産として保管されていた。彼らにとって興味のあるものもあればないものもあり、価値のあるものもあればないものもあった。興味も価値もないとされたものは無視され、逆のものに大きなエネルギーが注がれた。

彼らケストルの子孫に重要だとみなされたのは、アンベレオの文化だった」

ヘルガが語るのと同じ話を、イリチヤが語っている。

「アンベレオの数々の祭祀といっしょにカレンダーも引き継がれた。無視したもののなかには大事なものはなかったんだ」

「メソアメリカに残っている文化がひどくアンバランスに見えるのはそういうことか」、と健。

高度な数学知識を要するカレンダーや都市・建築技術と、メソアメリカ最初の文明と言われるオルメカの時代から延々と続く人身御供の習慣、部族間の血生臭い戦争が行われたこととの間には、奇妙に歪んだ価値観が透けて見える。健はそれを『アンバランス』と呼んだ。

「彼らがメソアメリカを占領してから二千年後、大洪水が襲った。それに続く天変地異が、マヤの『ポポル・ヴフ』にかなり詳しく描かれている。ひじょうな寒さと暗闇が続き、彼らは飢え凍え、神に乞うた。助けてくれと。すると神さまは言った。『崇め、奉れ。助けてやろう。その代わりに、血を差し出せ』」

「どこかで聞いたようなセリフだ」

「アンベレオが崇めてた神さまがそうだった。

彼らは大熊座から来た地球外生命体だ。あの最後の来訪の時、彼らはエネルギー補給ができなくてそのまま地球に居ついた。そして地下に潜って、空腹のまま、時が来るのを待った。

やがてやって来たのはエウメロス-黄金門市連合と七つの地下都市の人たちだった。この人たちは地下の神さまの餌食にはならなかった。波長が違いすぎて神さまの口に合わなかったんだ。

次のチャンスがやってくる。ケストルの劣化した子孫だ。大熊座からの神さまとケストルの子孫は波長が合った。

そして世界中を襲った大洪水の被害は地下世界へも及んだ。大量の水が地下へも流れ込んだ。地下の神さまをも洗い流そうとする洪水だった。でもそんな試練にも打ち勝った神々はいる。生き残った神々はより強く、より愚かに、より空腹になり、より多くの供物を人間に要求した」

「殺虫剤に耐性ができた害虫みたいだな」

「またそういう茶々をいれるう——バチが当たっても知らないからね。なにしろ、神々の要求は過熱する一方。人間の側からはそれをはねつけるなんて発想も、疑問も、あったかどうか。神さまにノーということは世界の破滅と同じことだったろうから」

318.

「マヤの長期暦に、4アハウ 8クムクという日付がある。マヤの創造の日で、グレゴリオ暦でいうと紀元前3114年8月11日。マヤの長期暦はこの日が基準になっているという、重要な日付だ。

この日になにがあったのか。

この日、新たな神が降臨し、マヤの歴史が始まった。

地上ではたしかにそういう日があった。

だが、本当の動きは地下世界であった。ミミズクが力を回復した日だったんだ」

「ここでテクトリが登場するわけか」

「それまでにもいたことはいたんだ。けど、新しくやってきて居ついてしまった神々は大勢いたうえに、仲良くやろうなんて気はまったくなかった。地上の人間は例の原子爆弾事件の余波と、それに続く極寒の時代を経てすっかり減ってしまって、神さまを崇めるエネルギーも激減した。だからそんな外的環境を地上で生き述べたケストルの子孫でとんでもなくタフだったとしか言いようがない。そんな彼らは地下世界の神々の格好の餌食だった。結局、双方似た者同士だった彼らは影響しあって一大王国を築いた。

テクトリはそんな中でもまれてたもんだから生き残るのに精いっぱいだったんだな。気を抜くと同業者にやられちゃうから。

そこへ大洪水が起きて地上も地下も一掃された。地上も地下も淘汰された。ケストルの子孫は完全にいなくなり土着の人間だけになった。ここに至ってついにテクトリの時代が来たというわけさ。彼女も苦労したんだ」

「すると——"B"の上位者とは——」

「まあ、そういうことだよ」

「なんでまたテクトリが？ おまえを？ そんなに親しかったっけ？」

「んなわけないでしょ！ 理由はいたって簡単。箔付けがしたいんだ」

「……おまえで箔がつくのか？」

「つくんだなこれが。ぼくは冥界王のたったひとりの子孫だから」

319.

大洪水後、混乱したのは地上だけではない。地下世界でもある。淘汰されて生き残った、といえ
ば聞こえはいいが、かろうじて生き延びた神々は、もはやベネトナシュも驚く低次の妖怪と化して
いた。

彼らの間で切磋琢磨というか、勢力争いが起こり、ようやく九人の神が生き残った。テクトリはそ
のひとりで、頭ひとつ抜きんで地上進出を果たしたものの、いつ足をすくわれるかわからないと
いう、きわめて不安定な立場だった。それに、最下層のミクトランは古来彼女の持ち物だったか
ら、外来種に持って行かれてたまるかという気概はたいへんなものであった。もう、執念だった。

こうして――

冥界最下層の女主（おんなあるじ）テクトリが、己の立場を盤石のものとすべく、イリチヤを欲し
ている。なぜなら、彼の存在によって、正当な冥界の王を名乗れるからである。

――と、ヘルガは締めくくった。

が、聴衆を見渡せば、なんとはなし、白けた雰囲気があった。

（ふーん……）（……で？）

つまり、背景はともかく、テクトリの存在は妖怪ベネトナシュ登場の時点でなんとなく想像できたこ
と。

話が安易。意外性がない。だからなんなんだ？ まるで筆者が責められているような雰囲気は気
のせいだろうか……

「みなさま、とくにバイスロイさま、筆者を責めてはなりません！ 私はこう思います。イリチヤはな
にか大事なことを隠している」

33・「4 Ahau 8 Kumku」

34・「Bolon ti ku」へ続く

あとがき

ヘルガさまひどい！ 筆者が行き詰ってるのをぼくのせいにするなんて！！

と、イリチャくんが沸騰しているのが目に見えるようだ――

まあ、新章へ入る際…ここから第六章です…登場予定の人たちに好き勝手に話し合ってもらおうのですよ。格調高く落ち着いた本編の外では大乱闘が繰り広げられていたりします。するとおもしろいことに、なんかどうか、ほの見える。たとえば、健とエドミールをいっしょにしておくとすぐにケンカを始める、エドミールの方が大人げない、ヘルガさまとレル・ヴァリスをいっしょにしておく、ヘルガさまの方が強い、本編では『ヘルガ！』とか呼び捨てにしているけど、プライベートでは『ヘルガさま』と呼んでる、とか。

こういう、（筆者には）面白いんだけど、本編にあまり関係ない、というのがこないだの『Fairy tale』だったり、あと、H&L本部で行われたコンサートでの寸劇のシナリオ、またはあんなものやこんなもの、いろいろあるんですが、webページなら割と簡単でも、電子書籍となるとなんやかや、手間がかかってですねえ……あ……webで？……

それはまあおいといて、行き詰ったのはホントです。肝心のアレをどうするんだ、筆者！

次回までにイリチャくんをなだめすかして、隠していることを吐いてもらわねば。

サブタイトル『4 Ahau 8 Kumku』は紀元前3114年8月11日。

なお！ 本作はだいたい、おおかた、フィクションです。

2025年10月26日 記

奥付

リ・コンストラクション

第三十三章 4 Ahau 8 Kumku

2025年10月30日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[freepik](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社